

11 シイラ漁場と海底地形

児島 俊平（島根県水産試験場）

1) は し が き

シイラの全国総漁獲量の約60%はシイラ漬漁業によつて水揚されている。この漁業は海面に漬木を敷設し、それに集まつた魚群を捕獲するという特異な漁法で、海底地形とは一見無関係に見えるが、その漁場は海底地形と若干の関係がある。

ここでは、シイラ漁業の概要を述べ海底地形との関係を報告する。

2) シイラ漁業と漁獲量

シイラがどのような漁具・漁法によつて漁獲されているかを農林統計表（1954～1962年）によつて調べてみる。第1表は主な漁法種類別にシイラの漁獲量とその百分率を示したものである。

第1表によると、釣・延縄および旋網漁法によるものが圧倒的に多く、平均すると旋網が全体の約60%、釣・延縄が約33%を占める。第2位以下には定置網・敷網・刺網など続くが、これらはシイラの漁法として問題とするに足りないほど僅かなものである。

シイラ漁法の主な種類が明らかにされたので、さらに漁具について詳述すると、旋網は全漁獲量の62%を漁獲しているが、その62%はシイラ旋網（漬漁業）によつて占められ、残りの0.3%が一艘あぐり巾

着網・2艘あぐり巾着網・縫切網によつて占められる。釣・延縄の主な漁具はカツオー本釣・マグロ延縄・その他の釣や延縄で、スケソウダラ延縄にも僅かながら漁獲されている。その他の主な漁具では、ブリ・マグロ定置網やその他の敷網・刺網があげられるが、また以西底曳網にも少量づつ漁獲されている。これは底曳網で捕獲されたものでなく、船員が航海の途中に釣獲したものである。

以上のように、シイラはほとんど総ての漁具により漁獲されているが、主要な漁具は2～3種に限られている。このことはシイラの行動¹⁾や胃内容物²⁾から推されるとおり、遊泳層が極く上層に限られ、せいぜい水深30m附近までを遊泳するためである。

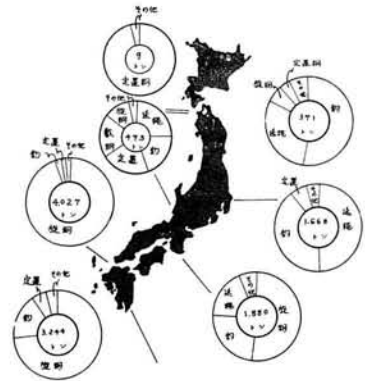
つぎに、海区別に漁法別の漁獲量およびその百分率を第1図に示す。

太平洋側ではカツオー本釣・マグロ延縄が主要漁具であり、日本海および東支那海側では

第1表 漁法別シイラ漁獲高（トン）
総漁獲量

漁 法	総漁獲量	
	9 7 9 9	1 0 0 %
釣および延縄	3,244	33.1
旋網	5,829	59.4
定置網	534	5.4
敷網	163	1.7
刺網	16	0.1
引網	14	0.1
底曳網	3	0.0

シイラ旋網によつて漁獲量の大多数を揚げられていることが特徴的である。すなわち、北海道海区は僅か9トンの漁獲であるからこれを除くと、太平洋北区においてはカツオ一本釣が第1位(45%)で、マグロ延縄が第2位(31%)で、その他の釣・延縄がこれに続いている。この順位は太平洋中区においてもほぼ同様であるが、太平洋南区においては少しおもむきが変り、シイラ旋網が第1位(51%)、その他の延縄が第2位(18%)を占め、カツオ一本釣は第5位に落ちている。



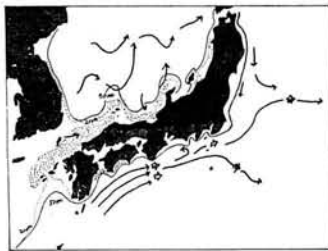
第1図 日本近海における海区別の漁法別漁獲量。

日本海北区におけるシイラの漁獲は、その他の延縄・釣で漁獲量の45%を占め、シイラ旋網はその他の敷網について第4位である。日本海西区では全海区第1位の漁獲量を揚げているが、その94%はシイラ旋網で占められる。東支那海区も日本海西区と近似した傾向を持ち、シイラ旋網が75%を占めている。

以上を総合すると、日本海西区と東支那海区の両海域でシイラの全国総漁獲量の約60%がシイラ漬漁業によつて漁獲されていることになる。しかし、日本近海に回遊するシイラ資源量の主体は、漁獲の少ない太平洋側にあることは述べるまでもない。¹⁾

3) 漬漁場の条件

日本近海のシイラ漬漁場と海底地形・海流との関係を第2図に示す。



第2図 日本近海の海底地形・

海流とシイラ漬漁場。

第2図をみると、海底地形の等深線は太平洋側で九州南端から房総半島にかけて接岸しており、大陸棚がやや広い海域は房総半島以北にみられるに過ぎない。それに比べて、日本海側では東支那海から朝鮮沿岸、および本土西部沿岸につらなる一連の広大な大陸棚が見られる。現在、シイラ漬漁業を行なっている地方のうち、秋田県から鳥取県に至る漁場はいずれも距岸10~30哩の範囲に止まっている。一方、島根県から長崎県に至る漁場は距岸80哩の沖合におよんでいる。太平洋側での漬漁業は宮崎県(豊後水道)・高知県(土佐湾)・香川県(播磨灘)沿岸の一部でごく小規模に行なわれているに過ぎない。

島根県沿岸の漁場を例にあげると、漁場内には沿岸線に沿つた距岸10哩線上を東西に約1哩間隔で総計69統の漬木設定線が沖合に向けてもつけられていて、それぞれの漬木設定線には距岸10哩の点から、1哩間隔で沖合に向け50~60個の漬木が敷設されている。しかし、漬漁場はおおむね水深300m以浅の海域に限定されている。それより深い海域で

は漬木を敷設するのが経済的に困難なためである。

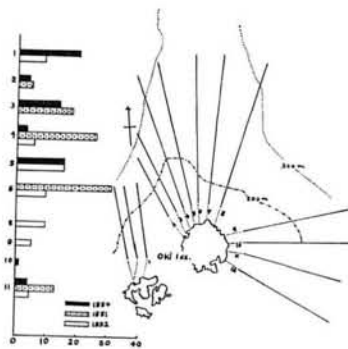
つぎに、夏季の海流をみると、太平洋側では九州南端から房総半島の間を黒潮が接岸して流れ、流速は1~3ノットと非常に大きい。しかし、日本海側ではせいぜい1ノット前後の速さである。流れが速いと漬木の受ける流動圧が大きく、そのために漬木が流失することも多い。事実、台風の通過後には多数の漬木が流失し、また急潮の場合には漬木の頭部を水中に没して棒立ちとなりシイラのつきが認められない。

以上を総合すると、漬漁場の条件として最も重要であるのは、海が浅く、流速がそれほど早くなく、かつ暖流々軸に近い海域であることである。この場合、シイラ魚群と海底地形とは直接の関係はない。

4) 漁況と海底地形

シイラ漬漁業を行なうには漬木を敷設する必要から海底地形が漁場に重大な関係をもつことは前述のとおりである。海底地形が漁況に直接影響を与えることはシイラの習性からみて極めて少ない。

隠岐島周辺には第3図のごとく十数統の漬木設定線があるが、例年好漁するのは隠岐島北側の隠岐海嶺沿いの漁場であり、隠岐島南東海域の漁場では香ばしくない。前者が好漁するのは隠岐海嶺に対馬暖流第1・第2分岐が集束され北沖へ流過する過程において、シイラ漁群を集約し滞留させるためと考えられる。いづれにしても、シイラ魚群と海底地形との関係は二次的なものに過ぎない。



第3図 漬漁場の地形的位置と漁獲量。

文 献

- 1) 児島俊平：シイラの漁業生物学的研究，（1966）。
- 2) ——：日本海西部におけるシイラ漁況の研究—Ⅲ、日水会誌、27，7（1961）